



連載 I
あの町この町
第53回

水界のほとり——三重県桑名市

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀

(イラスト＝著者)

JR桑名駅のやや北寄りを起点にして、八間通りがまっすぐ揖斐川の河口に向かつてのびている。名前のとおり広い道路で、歩道もゆつたりとつてある。マンホールにマンガチックな蛤はまぐりが刻んであった。帆を張った船をレリーフにしたタイルもある。東海道の宿駅桑名は「七里の渡」の船着場として栄えた。名物が焼蛤。

十返舎一九の『東海道中膝栗毛』では第五編の冒頭に出てくる。弥次郎兵衛・喜多八の道化コンビは第四編のしめくりで、熱田神宮のお膝元、宮の宿でひと騒動をしでかしたあと、渡し舟で桑名に着いた。五編目は東海道を中断して伊勢参宮寄り道の顛末である。さすがに出だしは悪ふざけをつつしんだようで、当時の浮世絵の第一人者、歌川豊国の絵が始まり。蛤に松が配してある。貝合わせに使われる蛤は松と同じく縁起物である上に、桑名名物の焼蛤は松かさで焼いたからだ。一九の賛がついていて、「名物をあがりなされとたび人にくちをあかするはまぐりの茶屋」。

第五編の刊行は文化三年（一八〇六）のこと。一九は先立って取材にきて、二週間あまりかけて伊勢路を歩いた。桑名にはもう一つ絵がついている。「御やすみ所」の看板をかかげた茶屋の前で、女が破れうちわで煽きながら蛤を焼いている。わざわざうちわで煽ぐのは、匂いで旅人を誘いこむ算段らしい。こちらの賛は「はまぐりの茶屋は同者を松かさ

にいぶせく世話をやく女ども」。

二〇〇年あまり前の風景は、むろん夢まぼろし。通りは広く、空も広く、車が疾駆するだけで人がかげがほとんどない。近年だけでも桑名は二度、大きな災害を受けた。昭和二十年（一九四五）、終戦まぎわの大空襲で市街地の大半が焼けた。戦後の復興が軌道にのった矢先、昭和三十四年（一九五九）九月の伊勢湾台風で河口部が壊滅した。

八間通りから北側の参宮町へ入ったところで、四層の基台をもつ立派な常夜燈と行き合った。前の太い石柱に雄渾な文字が刻まれている。

右 みの多度みち

左 すてん志ようみち

たしかに道が左右に分かれており、一方は北の旧多度町（現・桑名市多度町）へとつづく美濃街道だ。その多度大社は伊勢参りの人が必ず訪れるところとして知られていた。だから「みの多度みち」はわかるが、左の「すてん志ようみち」とは何だろう。ステーションを昔の人は「すてんしょう」と言ったから、駅を指示したのだから、建立の年号は明治以前である。何かの理由で道標の差し替えがあつて、一方の刻み文字が変わったのだろうか？

すぐ南の道路わきに石組みの井戸が残されている。北桑名総社の入口にあたり、キヨメの水場だったようだ。「持統天皇御舊跡」の碑が示す

とおり、由緒をたどると七世紀の昔にさかのぼる。河口の町は古くから人と物の行き来があった。

二度の大災害で過去がすっかり失せた町と思いきや、とんだ早合点である。旧来の生活道には、しっかりと歴史の証人が根を張っている。和菓子屋さんの横手の戸口に、まっ白な紙がペタリと貼ってあった。

「宅急便 無 です」

店に来て、その日のできたてを、その日に食べるお客さまだけで十分、それ以上の商売はしない。「無」の一字が無言のうちに商いのモラルを告げていた。

通りの向こうが北寺町海蔵寺。ここにも立派な石柱があつて、「寶曆治水薩摩義士之墓」。墓地の二画に二十四基がコの字型に並んでいる。すべて割腹した武士たちである。

歴史書には「宝曆治水事件」として出てくる。宝曆三年（一七五三）、幕府は薩摩藩に木曾・長良・揖斐川の治水工事を命じた。木曾山脈に発する三つの川は濃尾平野を貫流して伊勢湾に注いでいる。下流部は土砂が積もって河床が高く、しばしば大洪水をおこした。当時の官僚用語では「御手伝普請」といったが「手伝」とはいえ、工事の人も費用もすべて下命を受けた藩が受けもつ。薩摩藩は家老平田鞆負以下九百五十名の藩士を送って工事にあたった。現在の地図には「油島千本松締切堤」としてあるが、油島から堤を築いて揖斐川と長良川を分離させる。

川は道路工事とちがいで、工事中通行止めというわけにいかない。水はたえまなく流れてくる。とくに油島南端は三つの川がぶつかるところで工事は難渋した。鋤、鍬、モッコだけで川の流れを変えようというのだ。工事費は四十万両にのぼり、財政難の薩摩藩には大きな負担になった。国元の藩主や家老たち、お目付役の幕吏、どちらからも無理難題をいわれ、抗議の自殺者があいついで、最終的には五十一名にのぼった。さらに水にのまれたり病死した者三十三名。

即如傳代居士 (茂木源助)	宝曆四年	六月 十七日	割腹
實田法光居士 (濱島喜左衛門)	宝曆四年	八月 二十七日	割腹
實傳要貞居士 (水吉惣兵衛)	宝曆四年	四月 十四日	割腹
桂林智昌居士 (崎元才右衛門)	宝曆四年	九月 十六日	割腹
月庭慧天居士 (藤崎伊右衛門)	宝曆四年	七月 八日	割腹
本室智空居士 (川上右衛門)	宝曆四年	十月 十九日	割腹
高元院殿 節本了操大居士 (平田初貞)	宝曆五年	五月 二十五日	割腹
大蓮玄道居士 (家村源左衛門)	宝曆四年	十月 二十四日	割腹
青岳徹齋居士 (伴間長助)	宝曆四年	十月 二十四日	割腹
功岩良露居士 (野村八郎右衛門)	宝曆四年	八月 十四日	割腹
本室要源居士 (四本平兵衛)	宝曆四年	十月 七日	割腹
悦岩共折居士 (山元八兵衛)	宝曆四年	十一月 二十一日	割腹
高雲青峰居士 (水山孫市)	宝曆四年	八月 二十九日	割腹

海蔵寺 墓碑案内板(一部)

墓所の入口の案内板に戒名、氏名、没日がしるしてある。宝曆四年の工事の始まりから、四月の二名を皮きりに、六月二名、七月二名、八月八名、九月二名、十月四名……。すべて没日の下に「割腹」の二字が添えられている。最後が宝曆五年五月二十五日平田鞆負で、歯をくいしばって部下の死を見送ったのち、幕吏の立ち会いで工事成検分をすませるから切腹した。戒名は高元院殿節本了操大居士。節操きよらかな、高い識見の人だったのではなからうか。ほかの戒名も堅心元固居士、高雲青峰居士、提岩智全居士……。節を曲げず、責任感の強い人ほど、幕府と藩の勝手な言い分に苦しんだにちがいない。

油島は岐阜県海津市にあつて、美濃である。どうして二十四名が北勢・



六華苑洋館

桑名の寺に葬られたのか。複雑な政治事情から割腹者の遺骨の行き場がないのを見てとって、海蔵寺の和尚が申し出て引き取ったのだろうか。

そのまま川をめざしていくと水路ぎわに出た。住吉入江といって、揖斐川の水を市中に引きこみ、水運にあてていたのだろう。水の帯が九〇度曲がったところから古風な赤レンガ塀が始まり、これにそっていくと豪壮な大門の前に出た。以前どこかで江戸時代の「十萬石以上の石高の大名屋敷門」というのを見たことがあるが、それとそっくり。最盛期の桑名藩は十一萬石だったというから、てっきり旧藩主の屋敷跡と想像したが、ただ造作が新しいし、門構えはあきらかに市民風づくりなのだ。

諸戸家といって、山林王といわれた桑名の実業家の屋敷である。黒い

ナマコ塀の上から太い見越しの松がのぞいている。赤レンガ造りの大きな蔵が三連式につらなり、さらにうっそうとした屋敷林。これは初代諸戸清六邸で、裏手に二代目の邸宅と庭がひろがる。こちらは「六華苑」といって、市の管理のもとに一般公開されている。なにげなく門を入って目を丸くした。イギリスの建築家で、明治政府の招請で来日、鹿鳴館ニコライ堂、三菱二号館などを建て、辰野金吾ら代表的な日本人建築家を育てたジョサイア・コンドル設計の美しい建物があるではないか。

二階建て洋館自体はイギリス中流ブルジョワの家といった感じで、淡いセルリアンブルーの壁と、玄関、窓、ベランダ、サンルームの白で統一されていて清々しい。これに寄りそい四階建ての塔屋がついているのが珍しい。丸い壁面に曲面ガラスがはめこまれ、まるで巨大な望遠鏡を立てたぐあいだ。実際、塔にのぼると大きなレンズをあてたように、長良川、揖斐川の広大な水域が眼下に望めたのだろう。

内部が展示室を兼ねていて、初代・二代の諸戸家のことを知ることができる。建物以上に興味深いのだが、初代清六は十八歳で借金まみれの米屋を継ぎ、「生来の商才と際立った努力」で巨額の借財を三年で完済。その後、つぎつぎに事業をひろげ、明治二十一年（一八八八）には所有する土地の評価額で、有名な秋田の本間家を抜いて日本一になった。略年譜を見ながら首をひねった。しがない家業を継いでから、わずか二十年あまりで、どうして日本一の金満家になることができたのだろう。はたして商才と努力だけで、そんな離れワザができるものか？ 大いなる飛躍の鍵は、説明文のなかの次のくんだり、「明治維新という時代の変化を乗り越え、県令や政府高官の知遇を得て」にあるようだ。

「時間は金也」

初代の筆跡が残されている。説明には、初代清六が時間をムダにするのを嫌い、食事のときのおかわりの時間を省くため一度に二杯分をよそったとか、人力車は飛び乗ると同時に走り出さないと機嫌が悪かったと

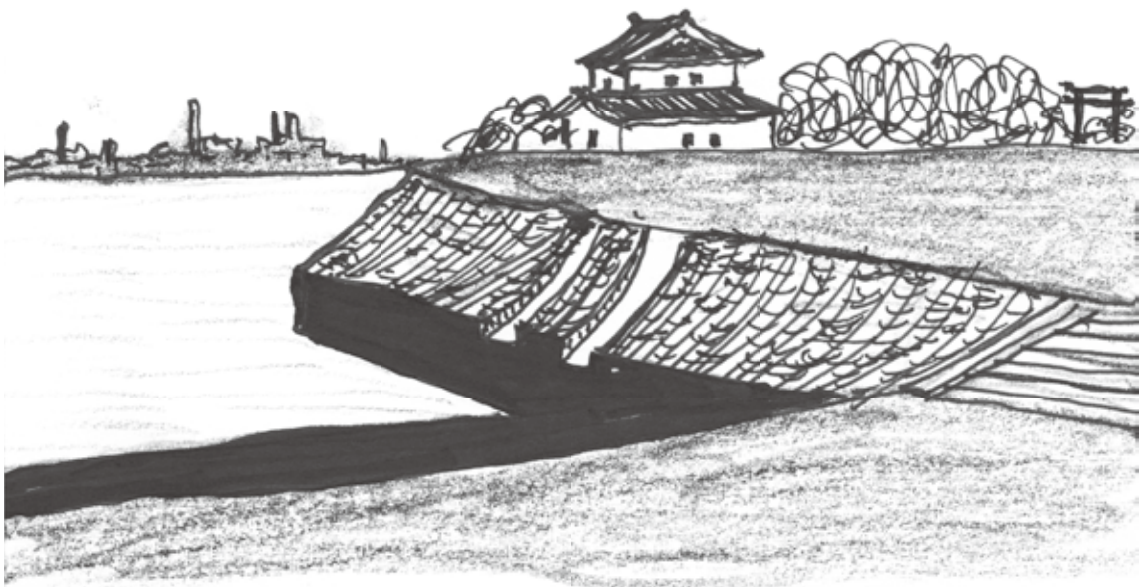
か述べてあるが、おそらくそんなタイム・イズ・マナーではないだろう。しかるべき筋から、いち早く情報を得て、着々と手を打っていく。時間に先んじる者が金銭を手にするこの処世術を含んでいると思われる。私のごく身近にいるが、おかわりの手間や車のモタつきにイラ立つような人は、まずもって金袋と縁がないものである。

すぐ前方が揖斐川で、水の神さま住吉神社がまつられている。水路の向こうが七里の渡跡。東海道唯一の海路は七里（約二十八キロ）あることから、この名がついた。東から来ると桑名は伊勢国の入口であつて、天明年間（一七八一〜八九）に伊勢神宮の一の鳥居が建てられた。記録によると、船着場の西側に舟番所、高札場、脇本陣、本陣があり、南側に舟会所、人馬間屋などが設けられていた。東海道、また伊勢街道は、もともと人馬の行きかう幹道であつて、その二つが合わさる桑名の宿の賑わいと華やきがしのばれる。

現在は絶壁のようなコンクリートの堤防がとり巻いている。料理旅館も海からへだてられて、こころなしかわびしげだ。昭和三十四年の伊勢湾台風は死者・行方不明五千余名を数え、東日本大震災までは戦後最大の大災害だつた。「想定外」の高潮と水害にみまわれて以来、尾張から伊勢にかけての海岸部には、いっせいに万里の長城のような堤防が築かれた。コンクリートの壁の向こう、長良川と合わさる揖斐川の川幅と水量ときたら、あきれるばかりだ。さらに細い帯状の長島をはさみ大河木曾川が下っていく。満々と水をたたえた水界は海とまちがえるほど広大で、その存在そのものが鬱然とした自然のエネルギーを伝えてくる。

水の威力に全身が怯えていたのかもしれない。城の内堀にあたる水路沿いの旧色街に来て、一気になごんだぐあいだ。「歌行燈」といった泉鏡花の小説にちなむ風雅な看板も見える。小説に出てくる料亭船津屋は今も健在で、おつとめの人らしい品のいい和服の人が小路へ入っていく。

元松平家の城下町だつたころの桑名は、もの静かな町だつたのだろう。



七里の渡跡

明治末年に訪れた北原白秋は『邪宗門』に収めた詩「桑名」で、「零落の戸」を下ろした廃市のような町並みを語っている。

「参宮の衆にかあらむ、旅びとの

ふたりみたり
二人三人はささきのほどひそかに過ぎぬ。

貸旅籠札のみ白き壁つづき

ほとほと遠く、物ごゑの夜風に消えて

……」

町並みのつきるあたりの老舗の戸が少し開いていて、明かりが洩れていたそう。通りすがりにチラリとのぞいたらしい。「行燈のかげに清き女の童物縫ふ」姿が目をかすめた。

詩人のロマン趣味が見つけた桑名である。おりしも同じ町で諸戸家の猛烈な蓄財がピークに達していた。二代目がコンドル設計の建物に着手したのも、このころである。初代は低地桑名の水の悪さに上水道建設を思い立ち、独力で水道施設を完成、町内五十カ所に給水栓を設け、無料で水を供給した。ただの金満家ではなく、「富者の義務」を知る近代の産業人だった。

八間通りに入る手前で道が分かれ、旧東海道は一路南下していく。美濃街道は西へ向かい、「右 みの多度みち」の道標に至るわけだ。

桑名市は戦後の復興にあたり、八間通りと平行して中央通りをつくり、東西の二本軸に南北の国道、県道を交差させて町づくりをした。中央の四辺形をかこむかたちで市役所、郵便局、体育館、市民会館ホール、中央公民館、ショッピングストア、銀行などがかたまっている。市民生活には、きわめて効率のいい配置である。

「桑名の近代建築物をめぐるスタンプラリー」

観光案内所でいただいたスタンプ台紙兼観光チラシには、コンドル設計の六華苑洋館のほか、洋式・和式とりまぜて明治・大正・昭和初期の建物が示してある。空襲と台風を生きのびた強者たちだ。そのまん中の

ヘソのような位置が寺町通り商店街。関西ではよく真宗の別院が巨大な堂を並べているが、桑名別院もその一つで、おのずと門前町ができた。三八市さんぱちといつて、三と八のつく日は朝市が立ち、地元の産物が並べられる。寺と門前町の習わしにコマリシャリズムを結びつけ、早くに地産地消を実践してきた。それもあつてかアーケードの寺町通りはシャッター街にならずに頑張っている。

「老舗が守る相伝の味」、これは和菓子。「桑名のみなさまのかかりつけ」、これは薬局。「おいしい交差点」、これはレストラン。「学芸向上・商売繁昌・縁結び・交通安全」、これは浄土宗のお寺。「ビジネスからファミリーまで」、これはホテル。多少欲ばりすぎもまじっているが、キャッチフレーズ一つにも苦心のあとが見てとれる。

一日がかりで町を一巡して、物産観光案内所にもどってきた。JR駅舎と渡り廊下で直結するかたちで、朝は改札を出たとたん、イッパイ飲み屋のある飲食街に入ったぐあい。ヘンなくあいだだったが、夕刻になると同じところがピツタリ駅前合っている感じである。

「やきはまぐりはいかがでした？」

案内所の女性に問われて、少し困った。せつかく名物の町に来たのに、残念ながらこちらは生来、貝類は大の苦手ときている。

「中原中なか也やも焼蛤を食べに来たんですよ」

そういえば駅舎のかたわらに桑名をうたった中なか也やの詩碑があった。ほんの十メートルばかり渡り廊下をもとると、赤提灯がぶら下がっていて、すでにでき上がりきみのおじさんがすわっていた。もとより蛤がメニューにある。

「その手は桑名の焼蛤」

なぜか急に古い言いまわしが頭をかすめた。調子のいい名コピーとともに水界の小さな生き物が、名物となつて全国へひろまった。

(いけうち おさむ)